『國民新報』1940年3月10日

[主張]　間違つた求福術

　二十とか、のとかひら、いろいろながはれてゐるのはかはしいりである。しかもそれがなるならいいざらず、々たるにはれてゐるのである。たとへばので、たまたまの折をつてかゝる馬鹿しいがいよいよをしめた。やをりかへるのなら、もらう、ののやので、がにずることがあれば、のはなしにはされてしまふであらう。ののに一をへたり、らしたりして、のをするとふのとじく、にらしいである。

　どうして、こんな馬鹿しいことがはれるのであるか。それはからであることであるが、それよりもろしいがこののをなしてゐるのだ。それはである。とはのをへないことだ。

　をらずしてをひ、をりつゝをけようとすることである。のをらずしてをひ、せずしてをみ、をむことなくしてをちんとすることである。

　これがといふもので、あらゆるはこのからずるものである。のをへないからやをてにする。によつてとをらうとするから、となるのである。とはにのをすのみでない。、のひによらずしてはをせんとするがきはてである。そなどすことによつて、ののやのによつてをふきは、まづにかゝつてゐることであるが、かういふ人はまたにもをひねまじきものである。なんとなればとのひによらずして、をるからである。

　のはにとへのをる。このをめなければは々の一をるであらう。しきへのとしきのをせもつてこそ、このをすことがるとふが、いづれにしてものをにゑけることは、にしても一一をひ、にしてはをるである。